

## 星の停年考(5) おおぐま座

土山 紀子

20時。春を告げるおおぐま座は、新春と共に北北東の空へ昇り、5月の初旬、まだ薄明が残る北の空に高々と南見します。

おおぐま座の代名詞のような北斗七星は、1時間に15度ずつ動く“北の大時計”として世界各地で親しまれてきましたが、その時代には車の形として見られることが多かったようです。α・β・γ・δの4星を車に、ε・ζ・ηの3星を車を引く人が馬と見るのです。北極星の周りをクルクルと動いていく様子が、車を連想させたのでしょう。

北斗七星に舟辺の星々を加えて熊の形と見たのは古代ギリシア人が最初で、ホメロスの『イリアッド』の叫には“車とも呼ばれる熊”という表現を見ることができます。

大きく堂々としたおおぐま座ですが、神話の叫では、女神アルテミスの侍女であった美貌のニンフ、カリストの変わり果てた姿であるとされています。

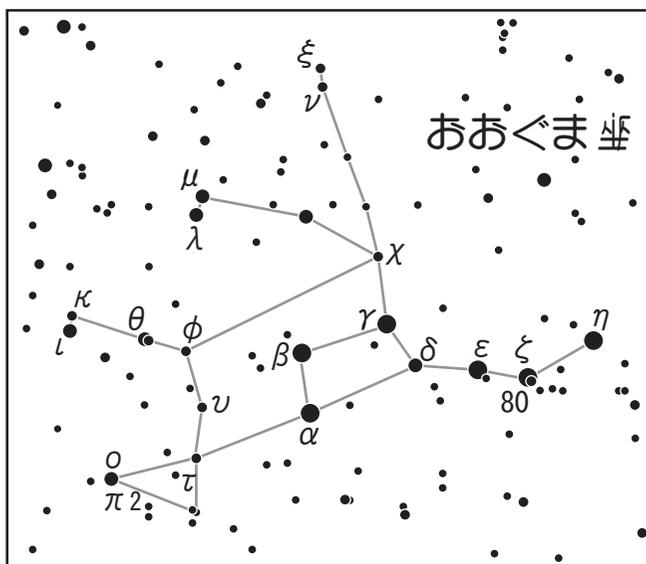
彼女は、ゼウスに見初められ子をもうけたばかりに潔癖性のアルテミスに追放され、ゼウスの妻ヘラの憎しみを受けて熊にされ、その姿ゆえ母とは知らぬ息子アルカスに殺されそうになり、最後はこぐま座となった息子と共に北の空を回り続ける運命となった、美人薄倅を地で生きたような女性です。

おおぐま座は大きい割には分かりやすく、要所にある星も楽しみやすい名前を持っているので、ぜひ想像力をふくらませ、星の並びをたどってみてください。

まずは北斗七星の星たちから。七星は、明るさとは関係なく柄杓の縁から柄杓に向かって、α・β・γ・δ・ε・ζ・ηとバイエル名がふられています。

α(1.8等)の名はドウベで、アラビア語で“おおぐま”という意味。もともと“おおぐまの背”という名前でしたが、“おおぐま”の部分が残って星名となりました。β(2.4等)の名メラクは、逆に“おおぐまの腰”というアラビア語のうち“腰”が残ったものです。メラク(腰)は、うしかい座ε、アンドロメダ座βの名でもあります。

お尻に当たるγ(2.4等)フェクタは、“おおぐまの股”というアラビア語、ファハド・アルドゥブ・アル・アクパールが短縮されたもの。7星の叫で一番暗いδ(3.3等)メグレズは、“おおぐまの鼻のつけね”というアラビア語の“つけ根”という部分が残った名前です。また、ε(1.8等)はアリオトという名を持ちますが、これはカペラ：ぎよしゃ座αのアラビア名アル・アイユクが誤ってつけられたものと考えられています。



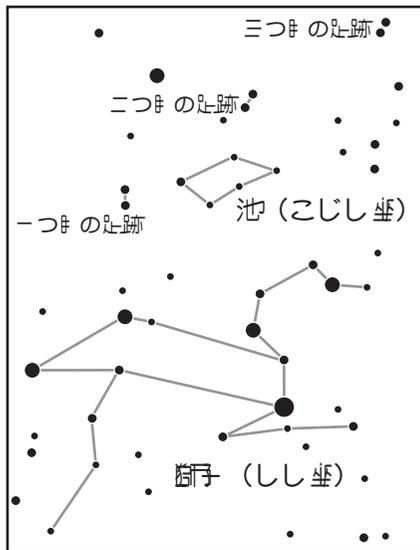
肉眼二重星として有名な $\eta$ 星（2.4等）ミザールは，“腰巾”を意味するアラビア語アル・ミザルが語源。ミザールと並ぶ80番星（4.0等）アルコルは，アラビア語で“かすかなもの”という意味です。 $\sigma$ はアル・サダクとも呼ばれ，こちらは二重星の分離を視鏡検査に使った名残で“試験”という意味。二重星は“馬と騎手”として知られ，“アル・ジャド”（騎手）と“アル・ジャウン”（駿馬）と呼ぶこともあります。

星の先端 $\eta$ （1.9等）は，アルカイドまたはベネトナシュで，古代アラビアの星座に由来する名前です。 $\alpha \cdot \beta \cdot \gamma \cdot \delta$ が作る $\Gamma$ 字形を楕に乗せるかに， $\epsilon \cdot \zeta \cdot \eta$ の3星を $\kappa$ を引く3人の娘と見ており，“大きい楕の娘達の頭”という意味のアラビア語，カイド・バナト・アル・ナアシュが語源。アルカイドはこの前半から，ベネトナシュは後半からできた名前です。 $\xi$ 星（ミザール）は，この $\sigma$ い星座にちなんで“アナク・アル・バナト”（少女の首）という名も持っています。

今宵は熊の頭の方を眺てみましょう。

星先の $\circ$ （3.4等）はムシダ。“鼻づら”という意味のラテン語が記した名前です， $\theta$ の近くに光る $\pi 2$ （4.6等）にも同じ名が付けられています。

熊の首あたりに散在する $\theta$ （3.2等）・ $\tau$ （4.7等）・ $\nu$ （3.8等）・ $\phi$ （4.6）等の星々には，サリル・バナト・アル・ナシュというアラビア名があり，“お主の余葬者”という意味。 $\alpha \cdot \beta \cdot \gamma \cdot \delta$ で作る楕に乗っていたのはお主だったのでしょうか。



南へ下ると，何れも並ぶ2星が3組み並んでいます。 $\iota$ （3.1等）と $\kappa$ （3.6等）， $\lambda$ （3.5等）と $\mu$ （3.1等）， $\nu$ （3.5等）と $\xi$ （3.8等）。これらは順に，タリタ（三つ $\theta$ の足跡），タニア（二つ $\theta$ の足跡），アルラ（一つ $\theta$ の足跡）と呼び，北にある $\iota \cdot \lambda \cdot \nu$ には“北の”を意味するラテン語“ボレアリス”を，南にある $\kappa \cdot \mu \cdot \xi$ には“南の”を意味する“アウストラリス”を冠して呼びます。

これら3組の星々は星座で熊の尻に楕がりますが，足跡の主は大熊ではなくカモシカです。獅子（しし座）に怯えたカモシカがジャンプしながら逃げた時の足跡で，3番 $\theta$ の足跡のところで池に立ち上ったこじし座の $\Gamma$ 字形へ飛び込んだという，“カモシカの跳躍”というアラビアの星座に基づいています。足跡が星座になるなんてユニークですね。

最後に，おおぐまの足の付け根の星 $\chi$ （3.7等）を眺てみましょう。この星はアル・カフラという名で紹介されることがありますが，これは“カモシカの跳躍”座のアラビア名が語源。元は $\kappa$ の名前だったものが， $\kappa$ と $\chi$ の字が似ていることから誤記され，今では $\chi$ の名として知られるようになったと考えられています。

星名にはこうした間違いが多く，このような誤記が後の文献に下整合を生んで混乱の原因になっています。これもそのよい例と言えるでしょう。